

すずき・おさむ 1934年、岐阜県出身。陶芸家。重要無形文化財保持者。父・鈴木通雄は釉薬の研究者。桃山時代から継承されてきた陶芸技法である志野の研究に励み、その技法を体得。

「やってもやってもキリがない。
まだまだわからないことだらけ。
いつも今度こそ、の連続」



「志野茶碗」(約径 13.5 × 高さ 12.4cm)

日本人の美意識と感性が凝縮した志野

photo: Yasukuni Iida text: Yurie Kimura

Artist Clip



鈴木藏

Osamu Suzuki

趣

味はやっぱり焼き物を作ることかな。失敗も多いけれど、次に窯に入れる時には、今度はいいものができるだろう、という気がしてくる。失敗したことを忘れてしまふんですよ」

鈴木藏さんが陶芸の道に入ったのは、父親の強い意向であった。

陶芸で生計を立てる大変さを見聞きし、興味もなかった鈴木少年が多治見工業高校を卒業すると、父親は自身の釉薬の研究の助手に据えて様々なことを教え込んだ。やがて鈴木さんは自ら作品を作り始める。23歳の頃だ。

「たまたま轆轤をやった時に、これなら俺もできるな、と思ったのがきっかけです。どうせやるなら新しいものを作ってみたい、という気持ちでした。最初に出品した現代日本陶芸展で入賞したのは大きな励みになりました。その作品がたまたま志野だったので、それがずっと続いています」

志野には「日本人の美意識と感性が凝縮している」と話す。以来、桃山時代の名品の数々から手法や

表現を研究し、ガス窯で試験を重ね、その中から見出した新たな可能性を追求して自らの作品に生かすことで、志野でありながらこれまでになく志野を次々と生み出してきた。

1994年には「志野」で重要無形文化財保持者に認定された。「伝統を今日にどう生かすか」が、作陶のエネルギーだ。

「でも、やってもやってもキリがないですね。志野が作られていた期間は約20年間だと言われている。僕はその3倍の60年くらい作っているけど、まだまだわからないことばかり。苦しいことは多いけれどおもしろいですよ」

今回の展覧会にも、新たな試みの志野を出品する。「若い時に作品を作るのは確かに大事だけど、年をとるほどに深まりをもって一つのものを作り上げることも非常に大事です。今回、『禅林句集』にある『裂古破今』を書けました。古を裂き、今を破ってしまつたら未来しかない。まだまだこれからです」

Information 高島屋美術部創設110年記念 人間国宝 鈴木藏展

—造化にしたがひ、自然にかへれとなり—

日本橋店 6階

4月11日(水) → 17日(火)

米子店 本館 4階

4月25日(水) → 5月1日(火)

京都店 6階

5月16日(水) → 22日(火)

岐阜店 8階

6月27日(水) → 7月3日(火)

大阪店 6階

9月26日(水) → 10月2日(火)

横浜店 7階

11月7日(水) → 13日(火)

ジェイアール名古屋タカシマヤ 10階

11月21日(水) → 27日(火)

岡山店 7階

12月5日(水) → 11日(火)



「志野茶碗」(約径 13.5 × 高さ 11.0cm)